山城に関するレポート
— 井戸について —

石　川　軍　二

Report on the Castle on the Mountain
— Well —

by

Gunzi ISHIKAWA

はじめに

戦国時代あるいはそれ以前の豪族が各地に割拠して攻防に明け暮れしていた時代には，防御の拠点として守るに易く攻むるに難い山岳に築城したのは当然である．古くは平常農耕に従事し，一旦戦端が開かれると領主の許に馳せ参じ，一族居館を去って本城に立て籠った．群小の領主が血をもって覇を争った俤を残す小規模の城郭を見て，伏見桃山時代の壮麗を極めた大規模な城に比較する時，物の数でないことを痛感する．遙か歴史の彼方に没し去った小さな山城に一歩足を踏み入れると，大手搦手の跡は辛うじて標柱によって知るのみで，他に頂上および階段状に造った削平地，空壕，堀切り，殆んど埋った空井戸に往時をしのぶことができる．一部に石垣を残すもの，初めから石垣を組まなかったもの，石垣は持ち去られて雑木雑草の繁茂するにまかせたもの等種々様々である．強大な軍事力を持つ豪族は弱小領主を併呑して大規模な山城を構築し群雄争覇の時代を迎える．これら山全体を城郭としたものが山城であり，山と平地を含めた城が平山城であり，平地に水壕河川，沼沢などをめぐらして防御としたものが平城で，城郭はこの三種に分類される．[1]

徳川泰平の時代には，すでに城郭は戦争目的を失い，また一国一城令によってすべてに不都合な山城は廃され，理想的な政治中心の城は平山城と平城になった．そのため明治維新まで存在した山城は，岩村城（岐阜県），高取城（奈良県），備中松山城（岡山県高梁市），そして津和野城（島根県）の四城であった．もっとも群上八幡城のように 140mの八幡山の頂上に天守閣を備えたため，一見山城と思われるものもあるが，大手門を始め政庁や侍屋敷等すべて山麓にあったため平山城に含まれるものもある．また岩国城は横山の頂上に築城し，大手門，二の丸，北の丸，本丸，天守閣等すべて備った山城であるが，ここには城番をおくだけで山麓に居館を構えていた．しかしここも一国一城令によって山上の城郭は破却され，麓の居館だけが残りここで政治が執られた．犬山城天守閣は木曽川に臨む丘上高く聳えているが，大手方面から進めば，平地の町屋から侍屋敷を通り，石段と坂道を経て本丸に達するという平山城の形である．松阪，伊賀上野，亀山，浜松，掛川等の諸城も丘陵を利用した平山城であり，著名な城郭として仙台，彦根，和歌山，姫路，伊予松山，高知，熊本の諸城が挙げられる．平城として名古屋，岡崎，西尾，豊橋等愛知県内の諸城と，三重県の津，桑名，岐阜県の大垣，加納，静岡市の駿府等があり，有名城郭に会津若松，松本，江戸，大阪，岡山，広島等がある．

城郭の成立が武力抗争である以上，当然防御に重点がおかれる．山城は位置が峻険な上に城門，石塁，空壕等で堅固にする．平山城は一部を丘陵で防御する以外に平城と同じく水壕，河川でとり囲む．特に平城は石垣を高く組み，水壕は名古屋城の御深井丸の裏側のように重要な

個所は広くする必要があった．吉田城（豊橋）は平城であるため，本丸の背後に徒渉の不可能な豊川を控え，いわゆる後堅固の城であった．

山　城

山城は大手門を始め諸曲輪が山上にあった．しかし徳川時代には城下町が政治の中心となったため，藩主邸，政庁等を不便な山上におく必要はなくなりすべて山下に降っている．備中松山城の山麓にある殿館跡は現在県立高梁高校になっており，正門から出た石段は往時のままであり，その付近の石垣は侍屋敷の名残りとしてはっきり指顧することができる[2]．岩村の城下町は本町の本筋に並んで川を境界に侍屋敷があり，その跡に岩村高校，その上段に小学校がある．坂道を登って右手に藩主邸跡があって石垣のみその当時を偲ばせる．再び坂道を登って一の門，次に土岐門，そして大手門に達する．高取城，津和野城にも同様のことがいえるが，かくして明治維新まで命脈を保ってきた．しかし備中松山城以外は，城内の建物は明治初年にほとんど取り払われて現在は石墨が残っているのみである．平山城が山と平地を併用しているに対し，山城でははっきり山上，山下と区別されていたために，山上の諸曲輪は番人をおいたにすぎない．ただ大規模な山城では重臣宅などを山の中腹においたもの，相当数の臣下の居住できるものもあった．春日山城，唐沢山城（栃木県）等は宏壮な規模をもち，諸曲輪を段階状に構えていた往昔の姿が想像できる．既述四城にしても大同小異であるが，平山城の群上八幡城は山上に諸郭を構えているものの多数の侍達が居住する余裕はない．

山城は山容を根本的に変える程人工を加えていない．岩村城は山頂を削平して本丸とし，次に段々下るに従って二の丸，八幡曲輪を設け，突端の部分を出丸とし，その他地形によって帯曲輪，東曲輪，長局等を設けたので一般の山城構築の場合と異ならない[3]．すなわち山の姿は単純であっても，地域が広大であれば多くの削平地，空壕を設けて複雑化しあるいは斜面を急にして登攀を困難ならしめるなど施工に工夫をこらして要害化に務めている．また築城するには独立の山であることが条件であるが，連峯である場合は他の高峯から見下されることは避けなければならず，同程度の高さの場合は，堀切りを幾重にもして隔絶し防備を厳重にした．

城が要害堅固であることを要求されるのは当然であるが，その要件として城門，壕，各曲輪の配置連撃など縄張り如何が挙げられる．しかも加えるに平時戦時を問わず飲料水の確保が緊要であり，特に山城の場合は食糧と同じ価値を持つものであり，特に籠城となった場合の飲料水の入手の重要性から城郭の井戸について述べてみたい．

井　戸

平山城・平城について

飲料水の確保できない城郭は戦力皆無といっても過言ではない．従って築城候補地を選定するにあたっては，ただ地形が要害であるということだけでなく，先ず水の入手可能な場所を発見することが最も重要な問題であった．平城の場合は普通の地質であれば水は必ず湧出する．まして河川や沼沢を防御にできる所に構築するなら井戸のことは予め考慮する必要はなかった．ただ平山城の場合本丸に井戸を掘るとなれば最高所であるだけにすべて水が出るとは限らない．姫路城のごとく曾て30数個の井戸があり（現在も10数個残存している）．藩主の住居のあった備前丸（本丸）近くに井戸櫓があり，現在も縄がないだけで井戸車，流し台など昔のまま保存されている．しかし天守閣だけは岩盤の上に建てられているため内部には井戸がなく，最も近い腰曲輪の井戸に依存していた．しかしその間の通路には六つの門をおいて厳重に監視していた[4]．この姫山のような丘陵の場合は水の確保が容易であるが高い山上の場合は非常

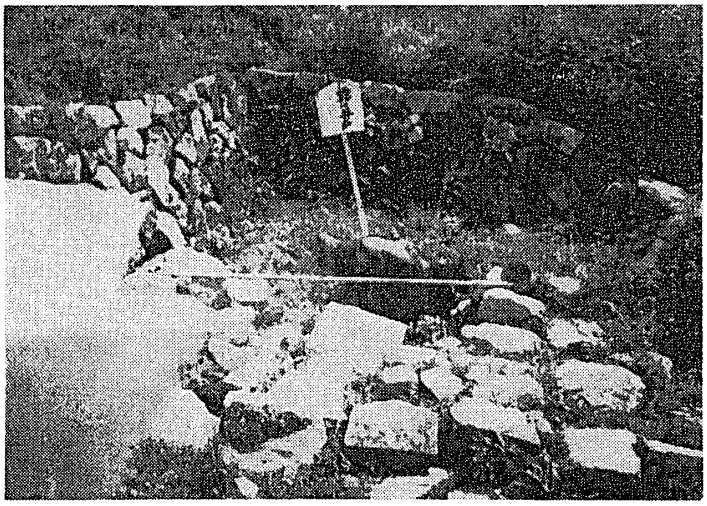
な困難があった．（掛川城のように小丘陵の狭い頂上に井戸があるのは数少ない例である）．

山城について

籠城戦記の中にいわゆる「白米伝説」を見ることが多い．馬の背に白米をかけて，城内の水が豊富であるかのように見せかけるのである．これは水の重要性と水不足の深刻さを物語っている．籠城の時の飲料水は兵糧と同価値の貴重品であった．「太平記，赤坂合戦の条」に「城中に籠る所の兵 282人，明日死んずる命も知らず水に渇せる堪え難さに皆降人に成ってぞ出たりける」とある．「雑兵物語」によれば籠城の時の一人一日の水の使用量は1升とあり，竹筒に1合～2合を入れて戦ったことから見ていかに水が重要であったかがわかる[5]．従って山城では谷間や低湿地に溜池を設け，また樋を組んで河川や谷川から水を汲みあげていたが，その重要性から独立した井戸郭，水の手郭などを構えた．現在水の手門址などの立札にその跡を認めることができる．

1.　岩村城（岐阜県岩村町）

海抜 720米の山頂に本丸を持つこの城の大手門址を過ぎてゆるやかな坂道を登ると，右手路傍に霧ケ井戸と呼ぶ井戸がある．それ程深くなく，水が澄んでいるので底が見える．この井戸水はどのような旱天にも涸れることがない．このあたりは道の左側が八幡曲輪，前へ進めば二の丸であって城の中心部ではない．井戸は本丸にあるのが理想であるが，最高所であるため地下水はない．名古屋，大阪，姫路の諸城は本丸に井戸を持っているが，山城では極めて稀である．この霧ケ井戸と大手門の間の坂道は盛夏の候でも水溜りや細流をつくっているところを見ると，湧水量の多い場所があり，そこに井戸を掘ったものと思われる．従って築城以来 700年の命脈を保ち得たのもこの井戸の賜ということができる．周囲を石垣で囲み，曽て井戸屋形のあった名残りを示す台石が残っている．ここに水汲桶が備えられているが別に飲料水としては二の丸に清例な水を手押しポンプで汲み上げる井戸がある．土地の関係者の言によれば，昔から存在していたが長らく発見されずに雑草に覆い隠されていたとのこと．この城の需要を十分に満たすことができたものと思われる．

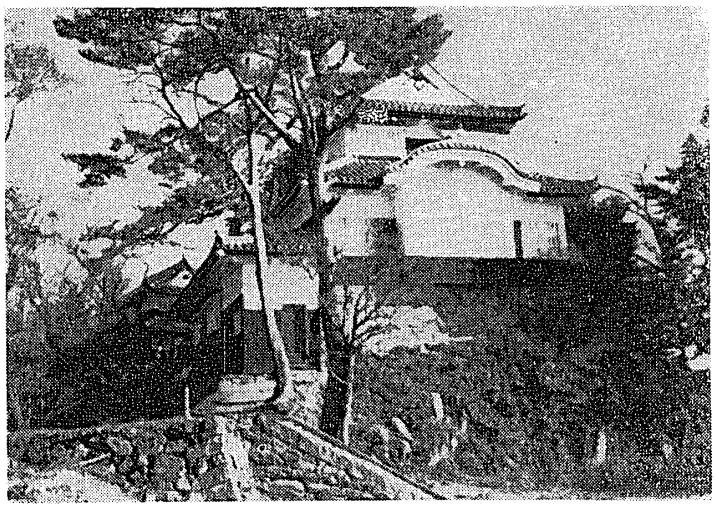


霧ケ井戸（岩村城址）

2.　備中松山城（岡山県高梁市）

標高 420米に構えられた山城で，現在改築して重要文化財に指定されている天守閣，櫓，土塀を持ち，山城として唯一の構築物を持ち，しかも最高の標高に立っている山城である．中腹より相当高い所にある大手門址から仰ぐと，段階状に石塁が重なり，岩壁が城の側面を削るようにそそり立ち要害堅固を誇っている．従って岩盤が多く，天守台も大きな岩の上に石垣を組

むという珍らしい工法がとられている．直ぐ隣接して立つ櫓も同じように岩盤の上に石組みがしてある．従って大手門から本丸までの内曲輪には井戸はなく，本丸の裏手から堀切りにかけた土橋を渡ったところにある外郭，すなわち天神丸に2m×3mの長方形の深い井戸があり，これを車井戸と呼び，これがこの高い山城唯一の飲料用水である．もしこの天神丸が敵手に渡れば，籠城は絶対に不可能である．しかし天神丸下の傾斜は極めて急で登攀は絶対に望めず，当然内曲輪を通過しなければ到達できないのであるから井戸の守備は容易であった．これは難攻不落の堅城であるが，水の確保が望めず郭外に求めた一例である[6]



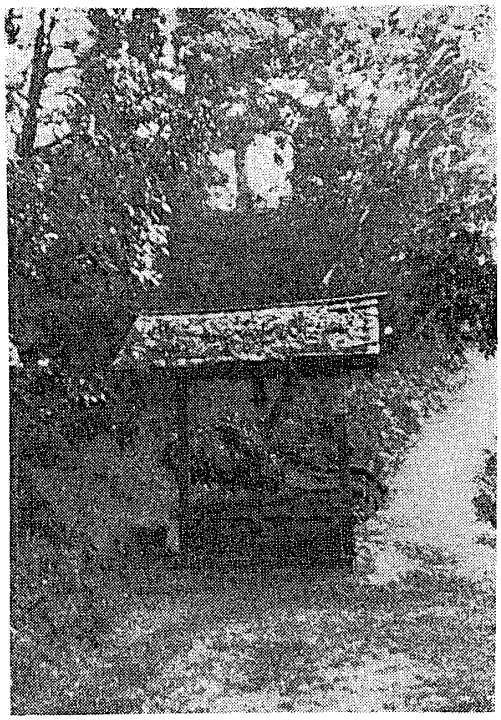
備中松山城（天守閣）

3.　唐沢山城（栃木県田沼町）

海抜 250米の山頂に藤原秀郷を祀る唐沢山神社があり，ここが本丸跡である．秀郷が始めて築城し，後佐野氏の居城となった．慶長7年信吉が佐野市の春日岡に新城を築いたため廃城となったが，遺構は往時のままに旧態を残している．

本丸の東斜面下に細道が通じ，そこに車井戸があり，中は深く暗くて底の見えない空井戸である．石組みで直径は一般の井戸と変らない．この井戸にも伝説として25米下に抜け穴があるといわれている．本丸から二の丸三の丸と下ると大手門の手前に大炊井戸がある．石組みの直径7米深さ9米の池を思わせる井戸で，水の涸れることはない．この二つの井戸は秀郷が築城した時，帰化人に掘らせたものという[7]　この山を遠く望見しても山城とわかる山容であり，しかも規模は壮大で，北条氏政が再度攻撃して遂に抜けず，また上杉謙信も大手門を越えながら退いたという輝やかしい歴史を持つ要害である．大手門に到るまでの旧登山道以外は傾斜が急で容易に人を寄せつけない．複雑な山容と巧妙に配置された諸曲輪，そしていくつかの堀切りによって攻撃軍を退けることができた．

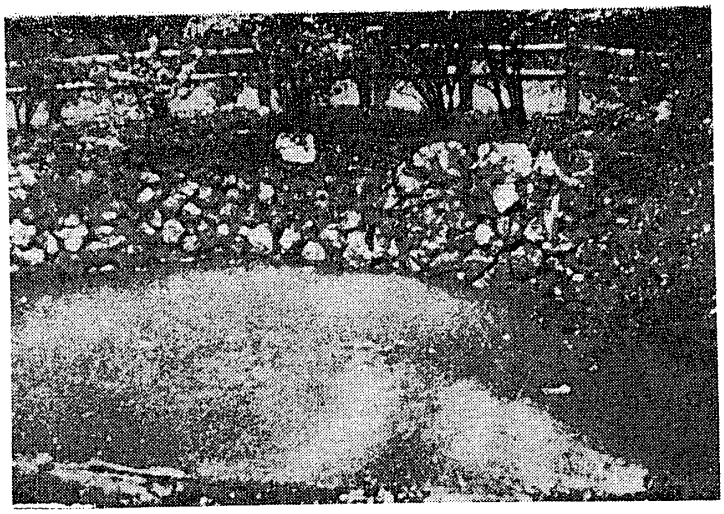
この湧出量の豊富な井戸水は将兵の需要を満たして十分であったものと信じられる．規模の雄大な山岳であれば高所にも地下水のある証左となる例である．



車　井　戸（唐沢山城址）

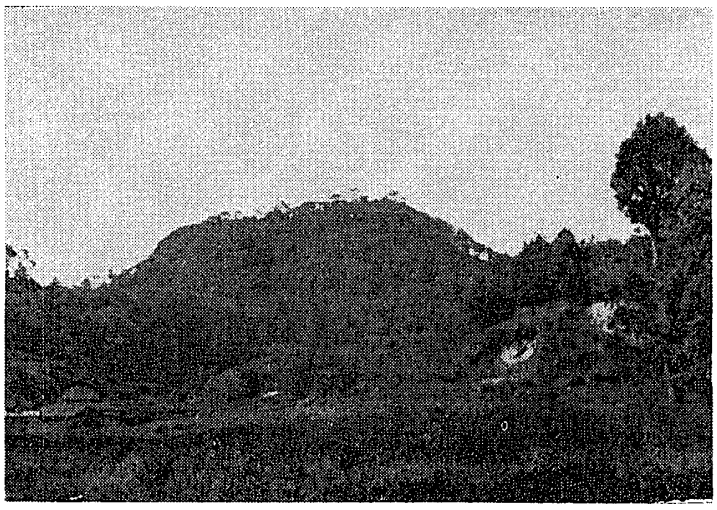
4.　高天神城（静岡県小笠郡城東村）

掛川市からバス40分鶴翁山の頂上にある．二つの峯に分れ，一方に本丸，御前曲輪，一段低く三の丸，腰曲輪があり片方の峯を西の丸とし現在天神社が祀られている．この二峯を結ぶ狭い鞍部に井戸曲輪があり，古井戸が石柱に囲まれて残っている．武田信玄の攻撃にも屈しなかったこの城は，その没後，子の勝頼の1万5千の兵によって陥落した．しかし長篠の役によって武田氏の武力の衰えた後，家康のため攻略された．兵糧攻めによって落ちたと史書にあるとおり[8]，家康はこの要害を長期戦に持ちこんで目的を達したものである．搦手からの登山道は現在石段であるがなかなかの急坂であり，山全体の斜面が極めて急であり，犬戻り猿戻りと称する険峻な斜面もある．



大炊井戸（唐沢山城址）

この狭い鞍部に静まる古井戸の側に立って武田，徳川両軍の屍山血河の攻防戦に大きな役割りを果たした一つの井戸の価値を考えると共に，地下水を探し求めた武将達の執念の強さを感じとれる山城の一つということができる．

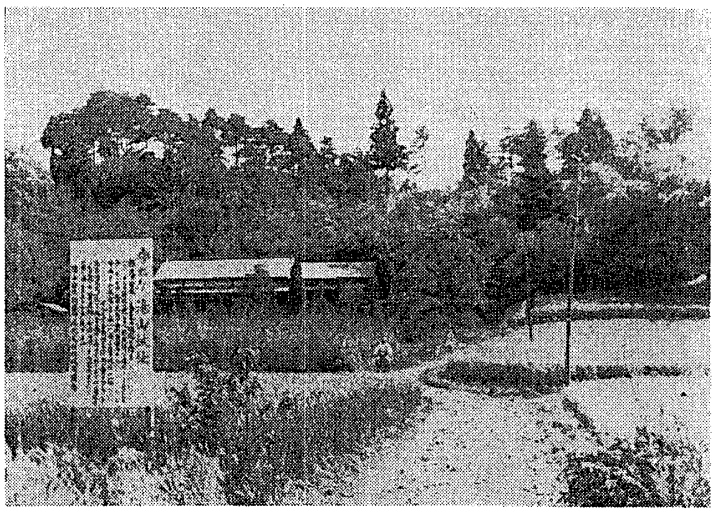


高天神城址の遠望

5.　滝山城（東京都八王子市）

多摩川の南岸に横たわる多摩丘陵にあり．対岸の拝島から青梅方面を見渡せる景勝の地である．同標高の丘陵の一角を占めているため丘陵城郭という名称をつけているが[9]，同一種類の城郭は他にはない．この地区は複雑な地形であるため，その入りこんだ丘陵を巧みに利用して本丸，千畳敷，二の丸，三の丸を設け，その他独立した曲輪が相互に関連を持ちながら配置されている．この城は北条氏康の二男氏照（秀吉の小田原攻めの時，小田原城中にて自刃）の居城であった．武田信玄が関東地方に兵馬を進めている時その攻撃を受け，本丸，二の丸を残すのみとなったが，遂に陥落を免れた歴史を持っている．しかし丘陵城郭は，隣接する同標高の丘上からの鉄砲，弓矢の攻撃にもろいという弱点を知った氏照は，ここを廃城として，山深くしかも武田勢の進路になる小仏峠に近い険峻な山に八王子城を築いてそこに移った．（後にここも小田原落城前，氏照の不在のところ，前田利家，上杉景勝の手によって落された）．今滝山城の本丸に井戸があるが，他の曲輪には見当らない．当時は，山頂に曲輪を，山下に居館

を構える根小屋式山城が多かったが，ここは多くの曲輪内に家臣が居住するという当時としては珍らしい様式をとっていた．これは高い山と異なり低い丘陵であるため生活に不便を感じなかったためと思われる．このように家臣団が居住する以上は，多くの井戸があったはずであるが，廃城となってすでに 400年曽ての邸跡は松林，雑木林と化している現状から見て，すべて埋めつくされたものと思われる．ただ曲輪と曲輪の間の浅い谷間に堤を築いて溜池とした跡が残っているが，その堤の一部を切り開いたため貯水できず，今は田圃として利用している．このように低い湿地に溜池を造って貯水した一例として挙げられる．

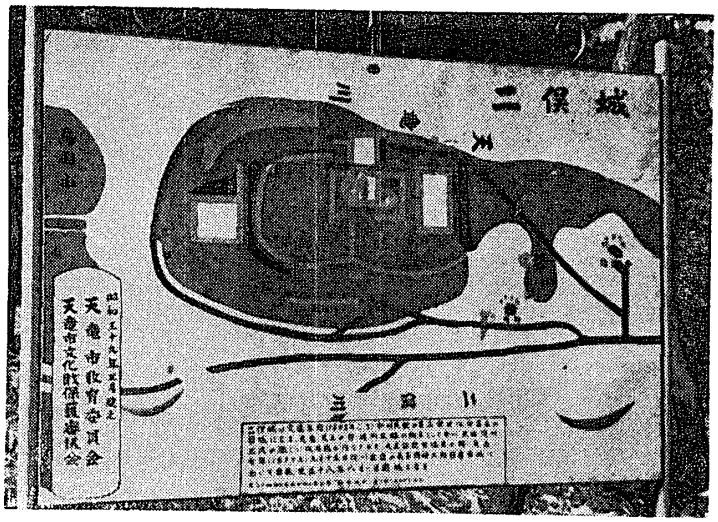


滝　山　城　址

6.　二俣城（静岡県天竜市）

天竜川と二俣川に挾まれた山城であるが，標高は山城としては低い方の部類に入る．ここは何回か戦闘の繰返された城であるが，家康の所有となって後，元亀3年武田信玄は4万の大軍をもって攻撃した．記録によれば，武田勢は，城兵が天竜川に井戸櫓を立てて水を汲み上げているのを見て，上流から数十の筏を流して櫓を破壊して水道を絶ってしまった．そのため城内は天竜の清流を眼下にしながら，飲料水に窮して開城するに到ったと[10]．城が直接天竜川に臨んでいるため櫓によって水の入手に便を得ていたのであるがこの櫓の復元したものが近くの清涼寺にあり，低地の井戸から崖上に汲み上げている．水の手曲輪が敵手に落ちたため落城した数ある例の中の一つである．

なおこの清涼寺には家康の嫡子信康の墓があり，葵の紋のついた門扉の中に静まりかえっている．信康は家康の正妻築山殿と共に武田氏と共謀して謀叛の疑があるとして信長は家康に信康の処分を強要した．三遠地方に地歩を固めつつあった弱小大名家康は家門を保持するため強大な信長の要求に従った．21才の信康は城内で自刃して果てた．



二　俣　城　図　面

以上明治維新まで存在した山城と，すでに廃城となっていた古城址のいくつかに触れたが，飲料水の確保について古人苦心の跡を実地に訪ねて，山城がその山姿の異なるのと同様に，水

の入手方法について千差万別の様式をとっているのに驚くのである．平城や平山城の井戸は廃藩置県の時，建造物の取り壊しと同時に埋められたものが多い．山城の井戸は，興味のある多くの問題を持っているが，長い年月を経て自然に崩壊し去って跡を止めぬものもある反面，社会から隔絶した土地にあるため文化の波に洗われず往時のままに数百年の歴史を祕めているものもある．文化遺産の一つである城郭の保存と共に，古人が苦心したにも拘らず棄てて顧みられない古井戸にも一顧の価値を認め，情愛を感じてよいのではないかと思うものである．

参 考 文 献

(1) 大類伸・鳥羽正雄共著 (1941)：日本城郭史 p. 419
(2) 高梁市役所編 (1961)：備中松山城史 図面
(3) 樋田 薫著 (1966)：岩邑城 p. 49
岩村町史刊行委員会編 (1961)：岩村町史 p. 84
(4) 朝日新聞社編 (1964)：国宝姫路城 p. 144
(5) 笹間良彦著 (1969)：戦国武士事典 p. 350
(6) 大類伸監修 (1967)：日本城郭全集⑩ p. 137
(7) 大類伸監修 (1967)：日本城郭全集② p. 238
(8) 大類伸監修 (1967)：日本城郭全集⑤ p. 77
(9) 大類 伸・鳥羽正雄共著 (1941)：日本城郭史 p. 420
大類伸監修 (1967)：日本城郭全集④ p. 47
(10) 文化調査会編 (1961)：続古城をめぐる p. 104